会　　報
The Japanese Association for English Studies
日本英語文化学会
日本学術会議協力学術研究団体

NEWSLETTER

No. 16
20 November 2022

研究ノート
清水　純子：映画『エルヴィス』――エルヴィス・プレスリー再臨・・・・・・・・3

研究ノート
佐々木　隆：『日本映画作品大事典』(2021)から見たシェイクスピア映画・・・・・・11

研究ノート
髙橋　強：日本とアメリカのスポーツ文化比較：高校野球を例として・・・・・・・・・17

研究ノート
松山博樹：*Richard III*、Hobbes、平和・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

研究ノート
Noboru Fukushima, A Brief Note on Unindividualistic Ophelia, No. 4. ・・・・・・・・・・27

会長の言葉
会長　中井　延美・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

大会研究発表一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

訃報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

追悼文
田中保　「追悼文（仁木先生との思い出）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
福島　昇「追悼文（宮本正和先生を偲んで）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

掲示板・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

編集後記　*NewsLetter* 編集長　清水　純子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

研究ノート

映画『エルヴィス』――エルヴィス・プレスリー再臨

清水　純子

『エルヴィス』（原題 *ELVIS*）
オフィシャルサイト：https://wwws.warnerbros.co.jp/elvis-movie/
2022 年 7 月公開
上映時間 159 分/ 言語：英語/ 制作国：アメリカ/
スタッフ: 監督：バズ・ラーマン/製作：バズ・ラーマン、キャサリン・マーティン/製作総指揮：ゲイル・バーマン、パトリック・マコーミック他/ 脚本：サム・ブロメル、クレイグ・ピアース/ 脚本・原案：ジェレミー・ドネル/ 撮影：マンディ・ウォーカー/ 編集：マット・ヴィラ、ジョナサン・レドモンド/ 音楽・音楽総指揮：エリオット・ウィーラー
キャスト：エルヴィス・プレスリー-オースティン・バトラー/トム・パーカー-トム・ハンクス/母グラディス-ヘレン・トムソン/父ヴァーノン-リチャード・ロクスバーグ/妻プリシラ-オリビア・デヨング/

★すぐれた伝記映画

バズ・ラーマン監督の『エルヴィス』は、生前のエルヴィス・プレスリー（1935～1977）を知る人も、知らない人も万人を満足させるすぐれた伝記映画である。エルヴィスの生涯に忠実に、手際よく、スマートにまとめている。2 時間 39 分の上映時間にもかかわらず、長さを感じさせず、飽きさせない。

これまでに放映された、特に亡くなった直後のエルヴィスの伝記 TV には良いものがなかった。黒髪にポマードべったりのもみあげのヘアスタイルだけが似ていて、とてもエルヴィスには見えない男優に、ピサの斜塔のようにうず高く盛られたヘアだけ目立つ可愛くないプリシラの登場は目をうたがった。こんな本物をはるかに下回る役者たちの出演と凡庸な演出のドラマを遺族はよくも許可したものだとあきれた。

しかし、今回のエルヴィスは上々である。本物を凌ぐことはないけれど、オースティン・バトラーのエルヴィスは、姿や動作、踊り方、南部なまりの独特な話し方、歌声までエルヴィスを彷彿させる。顔の輪郭や身体の骨格がエルヴィスに似ているバトラーは、遠目ではエルヴィスが甦ったように錯覚させる。顔だちは、エルヴィスというよりもジョン・トラボルタ似かもしれないが、それでも十分である。若い頃のエルヴィスの歌声は当時の録音技術の問題もあってそのまま使えず、バトラーに歌わせた（パンフレット『エルヴィス』31）というから、これはすごい！神業である。セックス・シンボルであり、キングと呼ばれたエルヴィスを演じるなんて並みの役者にはできない。バトラーの勝利である。

プリシラ役のオリビア・デヨングもまあまあである。実物の方が美しいと思うが、遠目はプリシラに見える。

一番得な役どころは、パーカー大佐を演じたトム・ハンクスだろう。恰幅のいいやり手の俗物のイメージしかないパーカー大佐は、エルヴィスやプリシラほど顔が知られていないので演じやすいし、観客は異議を唱えにくい。強欲だがビジネスの辣腕家であり、良くも悪しくもエルヴィスを操って作り上げたが、芸術的感性の欠落によってエルヴィスの発展を損ねた人物の光と影を説得力を持って見事に演じている。エルヴィスの死後、元妻プリシラとビジネスの権限をめぐって争った人物だが的確に描かれている。

★プライバシーへの配慮とわからない真実

それに対して、妻プリシラに対しては遠慮がちである。離婚につながるプリシラの家出は、プリシラと空手コーチのマイク・ストーンのロマンスにあったことは一切語られない。映画は、エルヴィスの薬物中毒と幻覚症状による発砲、セックスレスが離婚の原因だとするが、やはり関係者が存命だとプライバシーへ配慮するのだろう。

エルヴィスの取り巻きの男たち「メンフィス・マフィア」が、夫婦の間に溝を作ったことにも触れられていない。エルヴィスの側にも不思議な点があって、どこへ行くにも彼らを連れまわして、プリシラは手持ち無沙汰であった。またプリシラに関しては、母

グラディスを失って嘆き悲しむエルヴィスを慰めるべくエルヴィスの関係者が母にそっくりの 14 歳の美少女との出会いを設定した逸話もある。プリシラを愛するエルヴィスだが、人気のためもあるのだろうが、結婚を怖がって延ばし続け、プリシラの家族から訴えられそうになっていたという噂もあった。エルヴィスは、母似のプリシラを愛したが、娘が生まれて母になったプリシラを女性としてみるのが怖くなったと精神分析する人もいた。エルヴィスに潜む女性への恐怖以外に、アーティストでなく、ふつうの良家の子女であるプリシラとは分かり合えないところがあったのだろう。美女プリシラは、とぎすまされた音楽的感性をもってエルヴィスを作り上げ、叱咤激励した母グラディスとは、似て非なるものだったのだろう。

離婚後もエルヴィスは家族を愛し、必要としていたが、家族の離散がエルヴィスの心身の荒廃を早めたという分析もあるが、本当のことはわからない。エルヴィスの母グラディスは息子の徴兵期間中に情緒不安定になりアルコール依存症で亡くなっているし、エルヴィスの孫のベンジャミンは若くして猟銃自殺しているので、不幸が続く一家なのかもしれない。エルヴィスの薬物依存、浪費癖、極度の肥満は、環境のせいばかりでも本人の怠惰のせいでもなく、そういう運命に生まれついたためなのかもしれない。

しかし、映画の予告編にあったように、エルヴィスの孫のライリー・キーオは女優として活躍中なので希望はある。ライリーは、エルヴィスの面影を残した美女で、今後も楽しみである。

★マグネティックなエルヴィスの魅力

1935 年アメリカのディープ・サウス（深南部）のミシシッピー州テュペロのプア・ホワイト（貧乏白人）の一家に双子の次男として生まれ（兄は死産）世界屈指の歌手となったエルヴィスは、最も有名なアメリカ人であった。たぐいまれな歌唱力と独創的パーフォーマンスによって、世界中の若者のアイドルになったエルヴィスは、音楽界の異端児であり、革命児であった。白人でありながら黒人の歌唱法とフィーリングを身につけ、パワフルな男らしさを誇る一方で、少年のようなしなやかさと初々しさを持つエルヴィスは、セックス・シンボルに祭り上げられた。エルヴィスの美声と雄々しく煽情的になまめかしく腰をふって歌うスタイルに、女の子は興奮してステージめがけてパンティを放り投げた。PTA は眉をひそめて糾弾し、マスコミは「骨盤プレスリー」（エルヴィス・ザ・ペルヴィス、Elvis the Pelvis）と揶揄する。現在ではどうということのないエルヴ

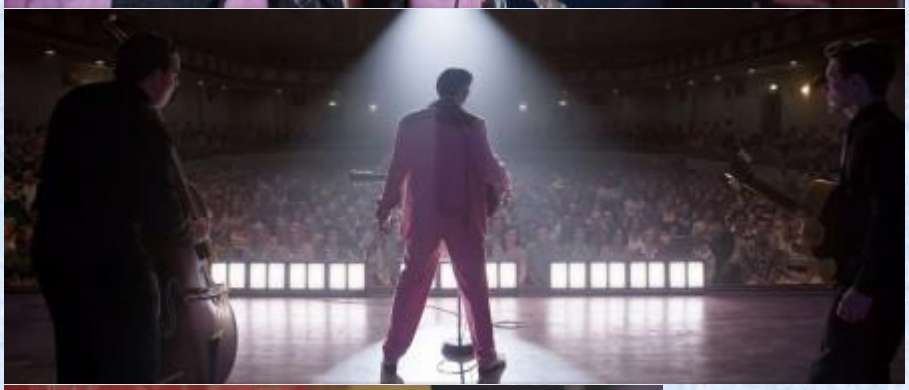
ィスのダンスは、20 世紀半ばのアメリカでは猥褻きわまりないセックスを連想させる動きとして、ピューリタンの国アメリカでは激しい非難の的になった。エルヴィスがギターのネックを突き出せば男性の攻撃的セックス、マイクを持ってなめ回すように歌えば、ゲイを喜ばせる愛撫ととられて、エルヴィスの一挙一動がセックスを連想させると解釈された。エルヴィス以前の男性歌手も男優もそこまで性的対象として見られたことはなかった。エルヴィスは、女性のマリリン・モンローに匹敵する、いやモンローを凌ぐセックス・シンボルになった。エルヴィスへの行き過ぎた性的関心と批判は、逆にピューリタンの性的抑圧の実態をあぶりだしていないだろうか？　その意味でもエルヴィスは、バイブル・ベルト（アメリカ南部を中心に聖書を字義どおりに信じるキリスト教が優勢な地域）の抑圧を解放したといえる。

エルヴィスのファッションを下品だと嫌う人も、エルヴィスの歌声には聞きほれてしまう。エルヴィスの魅力はマグネティック（磁気的）であり、一度引き付けられたら振りほどこうとしてもほどけない。とんでもなくアグレッシブ（攻撃的）で男っぽいと思えば、やさしくせつなく無垢であり、大胆で繊細、力強く見せながら実はもろく、パッショネイトでクール、危険でキュート、創造的なのに破壊的、動的で内省的、白人なのに黒人の心を持ち、革新的に見えて実はオーソドックス、背徳的に誘惑するかと思えば、限りなくホーリー（神聖）で純であり、悪魔的なのに天使でもあるエルヴィス、こんな両極端の二つの顔を使いわけた男などいない。

確かな歌唱力と独創的なスタイル、整った容姿と回転の速い頭脳を持ったエルヴィスは、比類のないアーティストだった。肥満で息が苦しい状態でもステージで熱唱し、ファンの大歓声を浴びたエルヴィスは映画でも見られた。しかし、実禄ではエルヴィスは、ファンの喜ぶ顔を見た後、幕が閉まると同時に倒れ込んでスタッフに抱えられる。その時もエルヴィスは、心から満ち足りてうれしそうだった。映画は「エルヴィスを殺したのは愛だ、ファンへの愛だ」と語るが、エルヴィスは音楽家として殉教したのである。両親と共に聖歌隊の少年だったエルヴィスは、キリスト教信仰を失って苦しんだとされるが、命に代えて自分のアーティストとしての生涯を全うした。

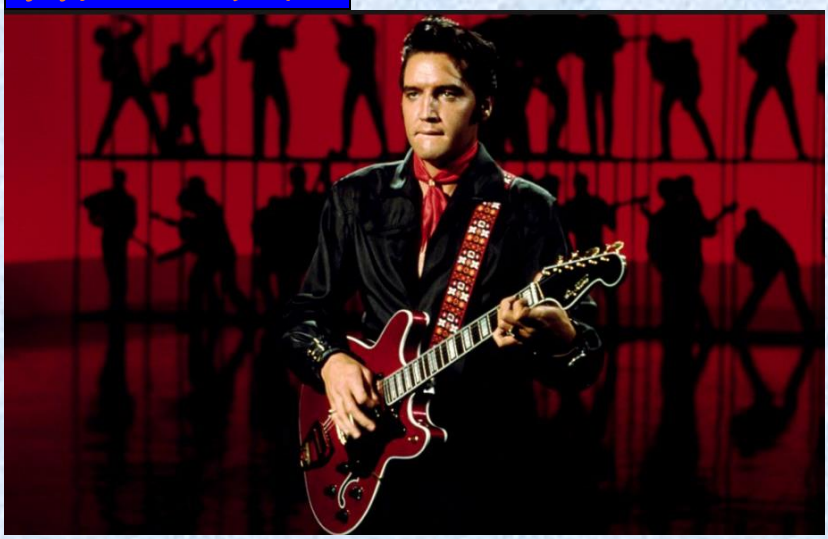
映画『エルヴィス』を得て、不世出のアーティスト・エルヴィス・プレスリーは、半世紀の時を経て再臨した。

©2022 J. Shimizu. All Rights Reserved.1 Aug 2022



(C) 2022 Warner Bros. Ent. All Rights Reserved

本物のエルヴィス



68 カムバックスペシャル

『監獄ロック』

『エルヴィス・オン・ステージ』

結婚式のエルヴィスとプリシラ

左は一人娘リサ・マリー　エルヴィス、プリシラ、後ろは父ヴァーノン

研究ノート

『日本映画作品大事典』(2021)から見たシェイクスピア映画

佐々木　隆（武蔵野学院大学）

プロローグ

日本の映画研究ではシェイクスピア映画はどのように捉えられているのだろうか。日本におけるシェイクスピア映画研究はロジャー・マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』（1974）を先駆けとして、1991 年に東京で開催された第 5 回国際シェイクスピア学会を経て、黒澤明への注目が高まった。海外のシェイクスピア映画研究では黒澤明（1910-1998）の『蜘蛛巣城』(1957)、『悪い奴らはよく眠る』（1960）、『乱』（1985）が取り上げられることが多いが、肝心の日本のシェイクスピア映画研究ではどうだろうか。

1　シェイクスピア映画研究

筆者はこれまでシェイクスピア映画研究についてシェイクスピア映画全体を取り上げた論文等を発表してきた（佐々木, 1994）(佐々木, 1995）(佐々木, 2019)。タイトルからではわからないこともあり、さらにこれまでほとんど取り上げられることのなかった荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(1950)、加藤泰監督『炎の城』（1960）についても取り上げた（佐々木, 2014）（佐々木, 2015）（佐々木，2016）（佐々木，2017）（佐々木，2018)。また、『リア王』のオマージュとして製作された小林政広監督『海辺のリア』(2017)についても論じてきた（佐々木，2020)。

シェイクスピア映画研究は日本よりも海外が進んでいる。ロジャー・マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』（1974）の日本語版への序文には次のような文章が寄せられている。

> 約 375 年前に書かれたシェイクスピア劇に明らかな精神と、日本の古典文化のなかにみられる精神の間には、ある共通の基盤があり、このことがあるからこそ、黒沢明をして『マクベス』を彼流に翻案した映画『蜘蛛巣城』を作らせたことは疑いない。この映画は西欧で絶讃を博した（マンヴェル　12)。

また、「シェイクススピア劇を映画化した最もすぐれた実例のいくつかは、実のところロシアと日本でつくられたのである」（マンヴェル　12）とも指摘していることは注目しなければならないだろう。日本では黒澤明の 3 本のシェイクスピア映画について本格的に研究が取り組まれるようになったのは荒井良雄「もう 1 本の黒沢シェイクスピア―『悪い奴ほどよく眠る』は現代日本の『ハムレット』？」『キネマ旬報』1994, 78-81）からである。荒井はすでに『シェイクスピア劇上演論』（1972）、マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』（1974）により国内外のシェイクスピア映画研究において日本では先駆的な役割を果した。その後、日本人によるシェイクスピア研究書も次々と発表された。

森祐希子『映画で読むシェイクスピア』、紀伊國屋書店、1996 年 5 月
狩野良規『シェイクスピア・オン・スクリーン―シェイクスピア映画への招待』、三修社、1996 年 10 月
狩野良規『映画になったシェイクスピア―シェイクスピア映画への招待』、三修社、2001 年 10 月
ラッセル・ジャクソン編／北川重男監訳『シェイクスピア映画論』、開文社出版、2004 年 2 月
名古屋シェイクスピア研究会編『シェイクスピア再入門　DVD・ビデオで愉しむ』、名古屋シェイクスピア研究会、2006 年 12 月

論文ともなれば、ある特定の作品に特化したシェイクスピア映画研究が行われている。しかし、黒澤明のシェイクスピア映画については『蜘蛛巣城』(1957)と『乱』（1985）の 2 本しか取り上げられないのが常である。また、荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（1950）、加藤泰監督『炎の城』（1960）ついては取り上げられていない。

２　『日本映画作品大事典』(2021)に見るシェイクスピア映画

現段階で最新の映画事典、山根貞男編『日本映画作品大事典』（三省堂、2021 年 6 月）ではどうなっているのだろうか。山根貞男編『日本映画作品大事典』は三省堂創業 140 周年記念企画として 100 年を越える日本映画史を一望したものだ（蓮實, 2021:117）。「凡例」には次のようにある。

『本能寺合戦』（牧野省三、1908）から 2018 年の公開作品までを対象とした（山根, 2021:4）

日本人が製作したシェイクスピア映画は 2018 年以前であるため、この大事典での考察

はシェイクスピア映画の取り扱いを確認するには意味がある。なお、三省堂ホームページ「日本映画作品大事典」には日本の映画史について次のように述べている。

> 日本映画史には二つの黄金時代があった。1930 年代と 50 年代で、映画が娯楽の王様として多大な観客を集め、質的にも量的にも繁栄を極めた。ひと口に映画といっても、その種類は多岐にわたるが、劇映画が黄金時代を担ったことは間違いなく、それは 1960 年代以降、現在に至るも基本的に変わらない（日本映画作品大事典、2021）。

日本人が製作したシェイクスピア映画について調べてみると次のようになる。監督名を五十音順で紹介する。映像が確認できるものを取り上げた。

荒井良平　『エノケンの豪傑一代男』(1950)

※「徳川家康の家臣が親友の恋の仲立をしたり、織田家との対立を仲裁したりする喜劇。」（山根, 2021:23）とあるが、シェイクスピアへの言及なし。これによりシェイクスピア映画として取り扱っていないことになる。

加藤泰　『炎の城』（1960）

※「戦国時代の瀬戸内海沿岸。明から帰国した若君が狂気を装い、父を殺して城主になった叔父に復讐する。「ハムレット」に想を得た物語。」（山根, 2021:213）

黒澤明　『蜘蛛巣城』（1957）

※「戯曲「マクベス」を翻案し、戦国武将の悲劇を描くスペクタクル時代劇。」(山根, 2021:285)

黒澤明　『悪い奴ほどよく眠る』（1960）

※「土地開発公団副総裁の秘書西幸一（三船）と副総裁岩淵（森）の娘佳子（香川）の結婚披露宴で、公団の課長補佐和田（藤原）が、建設会社との不正取引容疑で刑事に連行される。」（山根, 2021:285）とあるが、シェイクスピアへの言及なし。

黒澤明　『乱』（1985）

※「戦国時代、老領主一文字秀虎（仲代）が、三つの城を、長男太郎（寺尾）、次男次郎（根津）、三男三郎（隆）に分譲して引退し、弱気を批判した三郎を追放する。太郎の妻楓の方（原田）は秀虎に親兄弟を滅ぼされた恨みに燃え、策謀を凝らす。三郎の城は太郎と次郎の軍勢に攻められ炎上し、太郎は暗殺される。発狂した秀虎は、道化狂阿弥（ピーター）を連れて荒野をさまよい、三郎と再会するが、三郎が、銃弾

に倒れた後、息絶える。太郎の城は隣国の攻撃で燃え落ちる。シェイクスピアの戯曲「リア王」と毛利元就の 3 本の矢の逸話を基に、兄弟 3 人の骨肉の争いと老父の悲劇を綴る。主要人物の死を淡々と描く一方、色とりどりの旗指物を立てた合戦場面が地獄図を繰り広げ、無常観を醸す。」（山根, 2021:287）

小林政広　『海辺のリア』（2017）

※認知症で記憶をなくした盟友が、海辺をさまよう中、愛人との間の娘と出会い、演劇への執念を見せる（山根, 2021:332）。シェイクスピア、『リア王』への言及はない。しかし、タイトルに「リア」の表現があるため、『リア王』に関連したものではないかという予想はつく。実際に『リア王』のオマージュ映画となっている。

中江裕司　『真夏の夜の夢』（2009）

※【原】ウィリアム・シェイクスピア　「不倫の恋に疲れ沖縄・世嘉冨島に帰郷した OL と、彼女にだけ見える精霊との交流を軸に、村長の息子の結婚式騒動を描く。同名戯曲を翻案。」（山根, 2021:573）

光石富士朗　『大阪ハムレット』（2009）

※「大阪で母と暮らす中学 3 年、中学 1 年、小学生の 3 兄弟の家に、亡父の弟と名乗る男が住み着く。老け顔の長男、教師にハムレットと呼ばれた不良っぽい次男、女の子になりたい三男を巡る人情喜劇。（山根, 2021:834）

※「【原】森下裕美」とあり、これが森下裕美『大阪ハムレット』のマンガが原作であることがわかる。映画のタイトルに「ハムレット」の名前があることから、シェイクスピアの作品ではないかと想像するのは難しくないだろう。

最新の『日本映画作品大事典』(2021)では荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(1950)、黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（1960）についてはリストアップされているものの、シェイクスピア映画であるとの指摘はない。

3　シェイクスピア研究から見たシェイクスピア映画と映画研究から見たシェイクスピア映画

シェイクスピア映画に特化されたものではないが、『ハムレット』研究に特化した芦津かおり「ヤマト・ハムレット七変化」（2021）では黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（1960）光石富士朗監督『大阪ハムレット』（2009）が取り上げられていることは言及しておきたい。

しかしながら、加藤泰監督『炎の城』（1960）は取り上げられていない。「ヤマト・ハムレット七変化」というタイトルからすれば、加藤泰監督『炎の城』（1960）が取り上げられるべきものだ。しかし、実際には言及もされていない。おそらく、タイトルからはシェイクスピア映画であることがわからないことが理由であろう。かつて黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（1960）もこれが理由のひとつとしてシェイクスピア映画として判断されなかった経緯がある。ただ、『炎の城』の場合には、『ハムレット』の翻案映画であることが明示されていたが、シェイクスピア映画を扱う研究書では取り上げられていないのである。

映画研究という視点からは株式会社スティングレイ編『日本映画原作事典』（2007）では 1946 年から 2007 年 10 月までの日本国内の劇場公開されたもので、クレジットに「原作」がある映画として収録対象としたものだが、これにも『エノケンの豪傑一代男』、『悪い奴ほどよく眠る』は取り上げられていないばかりでなく、『炎の城』も掲載されていないのが実態だ。

シェイクスピア映画研究、映画研究の両方からシェイクスピア映画との言及がされていないのが、荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（1950）である。これには荒井良平（1901-1980）自身がシェイクスピア作品を原作にしたことを述べていないことが大きな理由であると考えられる（佐々木, 2017:29）。複数のシェイクスピア作品のエッセンスを組み合わせて翻案しているため、研究が進まなかったのではないかと筆者は推測している。

エピローグ

これまで注目されなかった作品であっても異なる研究方法やアプローチ、時代により新たに注目されることがある。今回特に注目したのは荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（1950）と黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（1960）である。この２つの映画はそのタイトルからはシェイクスピア映画として判断することはできない。また、監督自身が原作を明らかにしていない場合にはなおさらである。荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（1950）、黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』（1960）は最新の『日本映画作品大事典』（2021）にはシェイクスピア映画として言及されていない。事典の場合には客観性を重視することから、監督自身が明らかにしていない原作の存在については掲載しなかったと思われる。さらに荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』（1950）や加藤泰監督『炎の城』についてはシェイクスピア映画研究書では取り上げられていないのが現状

である。また、翻案映画研究では映像の存在、シナリオ（脚本）の存在は大きな問題である。特にシナリオは雑誌などに掲載されない場合もある。筆者の調査では荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(1950) と加藤泰監督『炎の城』のシナリオが雑誌に掲載されたことは確認できなかった。但し、これらの映画のシナリオが早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に寄贈されており、筆者は、かつて、こうしたシナリオを利用して 2 つの映画について分析を行った(佐々木, 2015)(佐々木, 2016)(佐々木, 2017)(佐々木, 2018)。タイトルから判断できないシェイクスピア映画が存在する可能性は大いにあり、今後新しいシェイクスピア映画の発見があるかもしれない。

印証資料

芦津かおり（2021）.「ヤマト・ハムレット七変化」、荒木浩、前川志織、木場貴俊編、『＜キャラクター＞の大衆文化　伝承・芸能・世界』、KADOKAWA。

荒井良雄（1994）.「もう 1 本の黒沢シェイクスピア―『悪い奴ほどよく眠る』は現代日本の『ハムレット』？」、『キネマ旬報』、1133 号、キネマ旬報社。

佐々木隆(1994).「シェイクスピアと映像――日本の状況を考える」、『英米文学と言語』、第 2 期第 3 号、ビビュロス研究会。

佐々木隆（1995）.「日本における Shakespeare 映像」、『武蔵野短期大学研究紀要』、第 9 輯、武蔵野短期大学。

佐々木隆（2014）.「ハムレット映画『炎の城』について」、『むらおさ』第 19 号、むらおさ同人会。

佐々木隆（2015）.「日本におけるシェイクスピア映画研究に関する一考察―『炎の城』を巡って」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第 8 輯、武蔵野学院大学。

佐々木隆（2016）.「シェイクスピア映画としての『炎の城』に関する研究―『ハムレット』とのストーリー展開の比較―」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第 9 輯、武蔵野学院大学。

佐々木隆（2017）.「シェイクスピア翻案映画としての『エノケンの豪傑一代男』：原作から脚本へ」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第 10 輯、武蔵野学院大学。

佐々木隆（2018）.「『炎の城』における劇中劇に関する研究」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第 11 輯、武蔵野学院大学。

佐々木隆（2019）.「日本のシェイクスピア映画について」、『むらおさ』、第 29 号、むらおさ同人会。

佐々木隆（2020）.「小林政広監督『海辺のリア』に関する一考察」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第 13 輯、武蔵野学院大学。

日本映画作品大事典（2021）. https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dict/ssd15903 (access on 20220708)。

蓮實重・山根貞男（2021）.「『日本映画作品大事典』刊行記念対談　〝日本映画史を網羅する〟強靭な意志の達成」、『キネマ旬報』、第 1877 号、キネマ旬報社。

マンヴェル、ロジャー。荒井良雄訳（1974）.『シェイクスピアと映画』、新樹社。

山根貞男（2021）.『日本映画作品大事典』、三省堂。

情報

荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』は Amazon の prime video で視聴できるが、加藤泰監督『炎の城』は視聴できない。また、黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』は Amazon の prime video で視聴できる。加藤泰監督『炎の城』は VHS でしか販売がなく、DVD 化、Blu-ray 化されていないことも入手困難、視聴が困難になっている理由のひとつ。prime video に関する情報は 2022 年 7 月 7 日段階のものである。

研究ノート

日本とアメリカのスポーツ文化比較：高校野球を例として

高橋　強（東海大学湘南校舎）

はじめに

この研究ノートは、2021 年 12 月 11 日（土）に行われた日本英語文化学会第 147 回例会で発表した「日本とアメリカの野球文化の違いについて」という発表に加筆修正を加えたものである。本稿では、日本とアメリカのスポーツ文化を比較する上で、比較対象として取り上げられる代表格の一つは野球である。この野球という広い範囲のスポーツの枠組みの中で、とりわけ高校野球というスポーツを取り上げ、日米の双方の観点から比較し述べることとする。本論では、日米の野球についての考え方の違いや文化の違いまでを総括して述べることで野球に関して深い考察を加えたものである。

1.　歴史的考察

1.1 野球の日本への伝来

1871 年（明治 4 年）に来日した米国人ホーレス・ウィルソンが当時の東京開成学校予科（その後、旧制第一高等学校、現在の東京大学）で教え、全国的に広まる。さらに 1915 年 8 月に大阪の豊中球場で第 1 回全国中等学校優勝野球大会が開催され、京都二中が優勝し、1924 年からは阪神電車甲子園大運動場で行われ,また夏の大会の盛況を受け、同年春からは愛知県名古屋市の山本球場で全国選抜中等学校野球選手権大会が開催され、

翌年からは甲子園球場で行われた。1927 年には企業チームによる都市対抗野球大会が明治神宮野球場で開かれた。（綿貫、2003 年）

1.2 飛田穂洲（とびたすいしゅう）の野球観

飛田氏は、日本野球の原点、土台を構築し、ベースボールから野球という用語を初めて用いた人物である。飛田氏は 1886 年生まれで早稲田大学を卒業し、武道に通じる野球道も提唱した。

また 1919 年（大正８年）早大野球部監督に就任するや否や徹底した厳しい練習を重ねることで一球入魂、根性野球、千本ノックという言葉を掲げ、精神面の修養を野球に取り入れ何よりも精神を鍛えることで野球技術が向上すると考え「練習常善」といって猛練習を重ねることにより精神力を鍛えることを常とし「練習量の重視」「精神の鍛練」「絶対服従」猛練習を行う武士的なもの、つまり精神主義を第一に掲げた人物である。

1.3 アメリカ野球の歴史

野球の起源は明確ではないが、イギリスの球技である、「タウンボール」が起源で 1830 年代から 40 年代に確立され、1861 年から 1865 年の南北戦争によって野球は北部から南部にも伝えられ、全米に広まった。そして 19 世紀後半に現在のベースボールが形成されるのである。また 1869 年には世界最初のプロ球団であるシンシナティ・レッドストッキングス（今のシンシナティ・レッズ）が設立され、1871 年には世界初のプロ野球リーグであるナショナル・アソシエーションが設立されたのである。1876 年にはナショナルリーグが設立され、メジャーリーグベースボール、いわゆる大リーグが成立した。日本へ野球が伝来されたのは前掲したアメリカ人であるホーレス・ウィルソンからベースボールが伝えられ野球となり現在に至るのである。今や日本はアメリカに次ぐ「野球王国」といわれるまでになったのである。（綿貫、2003 年）

1.4 日本プロ野球の創設

1920 年に早稲田大学野球部 OB により日本初のプロ野球チーム日本運動協会（芝浦協会）が設立され、1921 年には天勝（てんかつ）野球団として創設されたが、後に解散された。その後、1934 年、読売新聞社の正力松太郎によって大日本東京野球倶楽部が創設され、1936 年には日本初のプロ野球リーグ「日本職業野球連盟」が設立された。（綿貫、2003 年）

2.　野球人口減少の理由（高校野球）

世界の野球人口は約 3500 万人。内訳は、アメリカが 1200 万人、日本が 600 万人、韓国が 25 万人ともいわれるほど世界的に、とりわけアジア諸国では、野球は人気のスポーツとなった。

しかし全国の中学校の野球人口は減少傾向にある。逆にサッカーは上昇しているとい

う報告がなされた（江口、2020 年）。日本中学校体育連盟のホームページによると、2007 年には約 30 万人だった軟式野球の部員数は 2018 年には約 17 万人と、約 10 年の間におよそ半分近くに減少傾向にある。また日本高校野球連盟によると、高校生の年代は 2010 年に約 17 万人いた部員数が、2019 年には約 14 万人と 3 万人減少しているという報告があり、今後野球人口の減少が続くと野球というスポーツの全体的なレベルが低下することは間違いなく危機感を感じざるを得ない。

また、野球とサッカーの男子高校生及び中学生の競技人口を比較すると、付録 1，2 を参照すると明らかに野球よりもサッカーの人気が高いことが調査の結果からもわかるのである。

2.1「母親のやりがい・負担感」に関する調査、保護者の視点から

宮本（2017 年）の調査結果では、費用や係当番に対する保護者の負担が大きいという報告をしており、保護者の経済状況など余裕のない家庭では保護者の負担が理由になり、スポーツ活動を諦めているのである。日本の場合（少年野球から高校野球まで）は子どもがスポーツ活動をしない理由の上位は「保護者の負担」によるものが大きく、低学年では保護者の負担が上位を占めているのである。特に高校野球になると遠征費などが負担として重くのしかかり、年収が低い家庭においては負担の度合いが高いのである。また人間関係の良し悪しも非常に大きな負担となっており重要な要素となっているのである。

宮本の調査手法

インターネット調査では、小学 1～6 年生の第 1 子をもつ母親を対象とし、第 1 子の属性が各学年男女 400 名ずつになるように調査依頼し有効回答数は 2,368 名という報告がなされている。また小学生の子どもが複数いる場合は、第 1 子について回答を依頼した。（宮本、2017 年）ここで明らかとなったことは、人間関係に関する悩みは高校野球にまで及ぶということであった。このアンケート結果は以下の通りである。

宮本氏は、母親に対するグループインタビューを Twitter により何が一番つらいのかについてアンケート調査を実施した。日本の場合は以下の通りである。

質問：お茶当番など何が一番つらいですか。（８４名の母親からの回答）

・お茶出しなどの役割そのもの　20.2%
・人間関係　45.2%
・時間を取られること　21.4%
・その他　13.1%

アメリカの場合

在米スポーツジャーナリスト・谷口輝世子氏の連載「Sports From USA」（2019 年５月）

によるとアメリカで学校ではない地域のクラブに入った場合は、お茶出しなどは無く、子どもの送迎という観点からみると、確かに負担は感じられるようであるが「当番制」ではないものの、依然として送迎の負担と費用が重くのしかかるようである。さらに米国は車社会で「カープール」といって、他の子どもも自分の車に乗せたり、自分の子どもを他の保護者の車に乗せてもらったりして、練習や試合に出向く。ここでもやはり良い人間関係を構築しておくことが重要であると述べている。送り迎えが困難な場合、一斉メールでチーム全員に向けて SOS を発信すれば、誰かが手を差し伸べてくれるという報告がある一方、学校の運動部に入ると、送迎の負担はやや軽減される。試合会場への送迎にはスクールバスを使うことができ、ホームゲームの時には、試合の運営の多くの役割を保護者が担当し、場内アナウンス、スコア表示、売店（売り上げは運動部の活動費）の運営など多岐にわたり、日本とあまり変わらない現状であると指摘している。

3.練習時間と体罰について

プロ野球で活躍した桑田真澄氏（2009 年）が早稲田大学大学院修士課程の研究論文でプロ野球選手２７０人にアンケートを依頼し、その結果を参照してみると以下のことが判明したのである。

平日の練習時間　中学：2.9 時間　　高校 4.5 時間
休日の練習時間　中学 5.8 時間　　高校 7.3 時間
9 時間以上と回答した選手は７０人もいたという報告をしており、これは驚くべきことである。

体罰
監督から体罰を受けた　中学 45%　　高校 46%
先輩から体罰を受けた　中学 36%　　高校 51%

この結果から分かる通り中学、高校において 83%の選手が時には体罰は必要であると答えている。ここに飛田穂洲氏のきつい上下関係などの精神論重視が垣間見ることが出来るのである。一方で、体罰を受けることで野球が嫌になり辞めていく優秀な選手が多数いることも事実であり、これは野球界にとって損失であると桑田氏は述べている

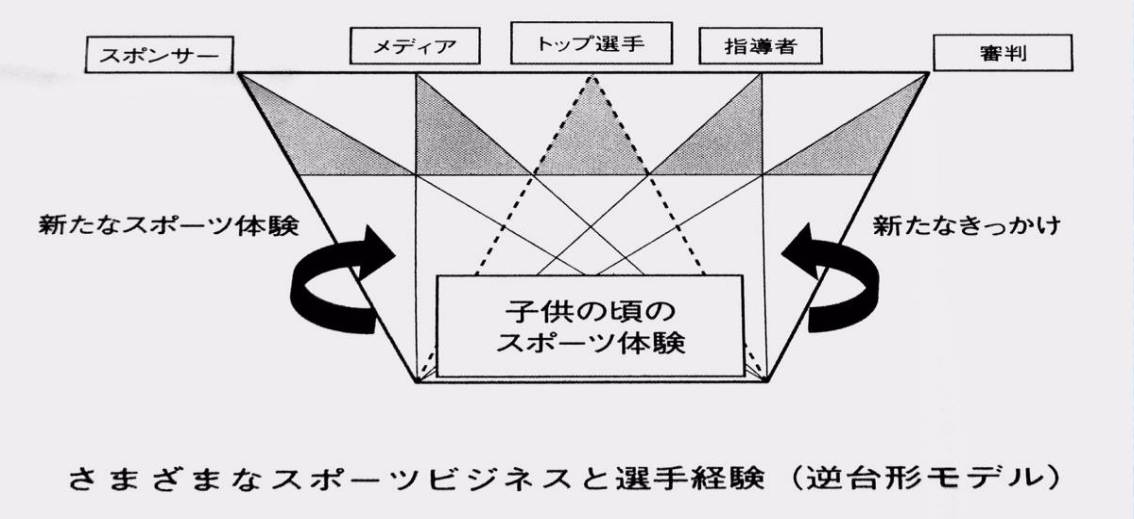
3.1 スポーツマンシップと逆台形モデル

飛田穂洲の野球道に代わる言葉として「スポーツマンシップ」を桑田（2013）は提唱している。これは次の「練習の質の重視」「心の調和」「尊重」という３つに分けられる「逆台形モデル」を提唱している。桑田氏は、「新・野球を学問する」（桑田真澄、平田竹男　新潮文庫　平成２５年３月１日発行）の中でこのモデルを提唱しているのである。

逆台形モデルの目的は、野球の底辺を広げ、スポーツ体験を数多く体験させることを目的としている。また「スポーツビジネス最強の教科書」東洋経済新報社刊行の中で、スポーツビジネスの現状について勝利、普及、資金のトリプルミッションの観点から平

田（2012 年）は文武両道も重要であると指摘している。つまり武の中に文がある。頭を使って野球をし、勉強することで幅広い知識を身に付け、それを武に生かすことができることを平田（2012 年）は提唱している。

逆台形モデル



4.日本とアメリカの野球に関する文化的相違

4.1 シーズン制

アメリカでは、日本の高校野球連盟に相当する組織は存在しない。しかしこれに相当するのが全米州立高校協会（National Federation of State High School Associations＝NFHS）である。野球部の活動を一年中やっている日本とは違いアメリカでは、春夏は野球や陸上、秋はフットボール、冬はバスケットボールやアイスホッケーといった形で季節ごとにプレーしているのが現状である。アメリカにおいては、スポーツ競技間の「共存共栄」ということで一つの競技に偏らないように様々なスポーツを行うように指導しているのである。また競技ごとに練習時間や競技の時期を明確に規定しているのである。さらに一日の練習時間も厳しく制限して、一つの競技に偏ることなく、各競技で生徒の個性を伸長できるように工夫されている。しかも競技横断型の組織により運営されており、日本の高野連のように競技縦割り型の組織ではないことも特筆すべきことである。

4.2 競技運営方式

日本では、甲子園大会のように全国規模の大会をトーナメント制で実施しているがアメリカの高校スポーツでは州レベルが最大の大会となっているのである。また運営に関しても州内のリーグ戦が基本となり、その中で一部の上位校だけが決勝トーナメント（プレーオフ）に進出する形となっている。日本の場合は、基本的に一回戦で負けるとそれでシーズン終了となるが、アメリカの高校野球では、3 月から 5 月にかけて少なくとも 20 試合前後の公式戦が開催されるので、試合数が日本と比べると圧倒的に多いの

が特徴である。

4.3 階層制

アメリカでは高校の生徒数に応じて所属ディビジョンが細分化されているのである。例えばニューヨーク州では、ニューヨーク州公立高校スポーツ協会（NYSPHSAA）は「バーシティ」（一軍）、「ジュニア・バーシティ」（二軍）、「フレッシュマン」（1 年生）という 3 つのクラスに細分化されており、別々のリーグ戦が同時並行で開催され、チームに登録できる選手数も競技ごとに厳密に規定されている。この同じ条件の下でフェアネス（公平性）、つまり平等な条件での競争を実施することによりメンバー全員が試合に出ることが出来るように組織化された試合を実施しているのである。

4.4 スポーツをする目的の違い

アメリカではスポーツは「競争」と「娯楽」を目的とし「形式美重視」と「楽しさの追求」を目的とし、互いに「競い合って楽しむこと」「フェアネスの精神」,「子どもたちが楽しめる環境」を何よりも重視しているのである。また階層制を導入し、楽しめる機会を創出しているのである。日本の場合は、1 回負けたらシーズンが終了してしまうのとは大きく異なっているのである。また部員が多すぎて試合に出られないのは、楽しくスポーツを行える環境が整っているとは言えないのである。このような例は甲子園に出場するいわゆる常連校に多く見られる傾向にある。

4.5 アメリカにおける高校野球の起用法

アメリカでは、選手の数を各チーム 12～13 人程度に制限し、必ずその全員を毎試合ベンチ入りさせ、全員出場が原則である。一方、日本の場合は、レギュラー以外は試合に出ることがなくずっと補欠であることが当たり前となっており、折角厳しい練習をしてきたのに試合に出られないなどということは日常茶飯事である。この点で双方の野球に関する意識のずれが生じていることは否めない事実である。

4.6 チーム移籍とトライアウト対チーム帰属意識

アメリカ人と日本人とでは、チームに所属するという意識についても決定的に違う。日本では、一度入団したらチームを変えることはないが、アメリカでは、自分が最も活躍できるチームを求めてチームを移籍し、「トライアウト」システムを利用し、他のより環境の整ったチームへ移籍するために、トライアウトを経て次のシーズンにはライバルチームで中心選手としてプレーすることも日常茶飯事であり、より強い高校に転校してプレーするケースは珍しいことではない。またチームに残されたメンバー達も裏切りの感情は全くなく、むしろ応援するというのが普通の感覚なのである。

4.7 指導法の違い

日本とアメリカでは、高校野球における指導方法も違う。日本であれば「Don’t mind!=ドンマイ（気にするな）」というがアメリカの指導者は「Good try!（よく挑戦した）」と褒めることから指導しているという特徴がある。仮に三振しても積極的で力強い空振りであれば「Good try!」と声を掛け、バッティングについては、「強く・遠くに飛ばすこと」を重視しており、仮にゴロを打って「転がせ」などと指示を出すコーチはいないのである。失敗しても挑戦したことへの評価が高いのが“American spirits”で、この「Good try!」の精神は小学生に留まらず、大人になるまで続くのである。また野球の捉え方についても日本の高校野球では、教育の一環として野球を通して友情、チームプレイ、礼儀、挨拶などを学んでいくことが重要視されており、筆者は、これは非常に重要な要素であると感じている。一方、アメリカにおいて、野球は“教育”ではなく“スポーツ”と捉えており、“try”することを重要視しているという特徴があるのである。

5.纏めと提言

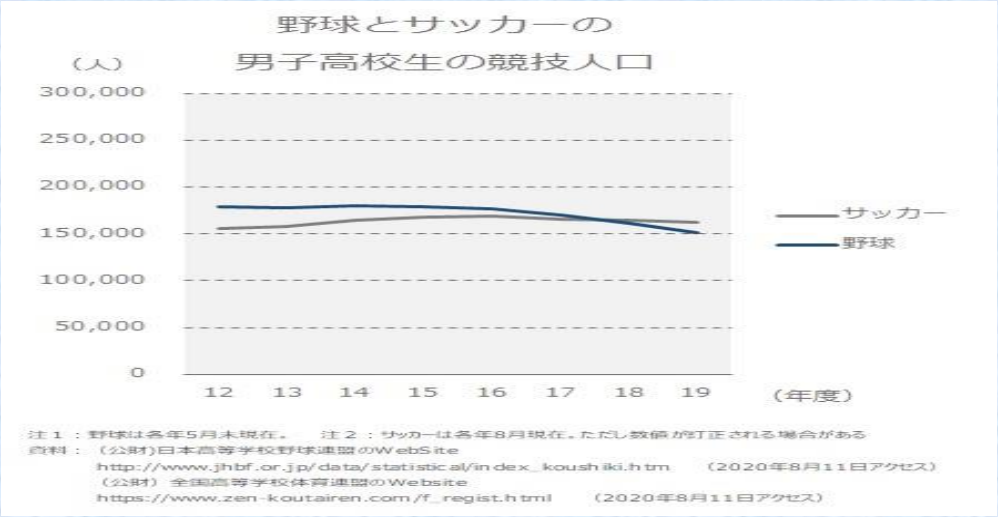
日本の場合は、精神主義、根性論から脱却し、勝利至上主義ではなく、すそ野を広げ野球を楽しむことを重視させることが重要である。そうすることで野球は楽しくやるスポーツであるという認識のもとに行われなければならない。そうすることで野球人口の減少に歯止めをかけることが出来るのではないかと筆者は考える。また、逆台形モデルを確立し、練習時間の短縮、体罰の禁止を実践し、階層性により補欠の選手でも出場機会を作ってやることが重要である。またシーズン制を導入し、他のスポーツにも取り組ませることにより、他の競技で自分の力を発揮できるかもしれないことを見出すきっかけを与えるべきである。加えて、全員参加型の野球を広く実践し、保護者の負担の軽減をすることで子供が伸び伸びと野球に取り組める環境を整えてあげることが日本の野球の発展に大いに寄与することであると考える。将来を担う子供達には野球の楽しさを味わって頂き、心の底から野球は楽しいスポーツであるという認識をもってプレーしていただくことを願ってやまない。

参考文献

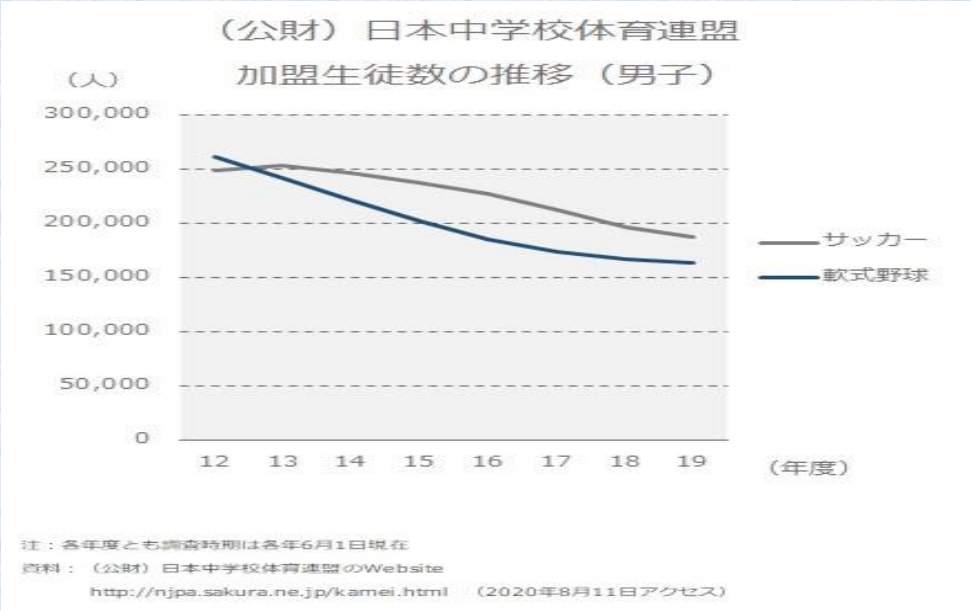
池井 優(1991)「野球と日本人」 丸善ライブラリー
江口　知章(2020)「野球人口についての調査」　新潟経済社会リサーチセンター
桑田真澄(2010)「野球道の再定義による日本野球界のさらなる発展策に関する研究」
　早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文
桑田真澄、平田竹男(2013) 「新・野球を学問する」新潮文庫
佐山 和夫(2002)「野球から見たアメリカ」 中公文庫
（公財）日本中学校体育連盟（2020）
（公財）日本高等学校野球連盟（2020）
谷口　輝世子（2019）「Sports From USA」　連載コラム　THE ANSWER

宮本　幸子（2017）『「母親のやりがい・負担感」に関する調査』　笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所
綿貫博人(1989)「アメリカのカレッジベースボールの組織とその現状についての一考察」 慶応大学体育研究所紀要　Vol.129
綿貫博人(2003)「日本の野球とアメリカ合衆国のベースボールの相違についての一考察」 慶応大学体育研究所紀要　Vol.42

付録１　野球とサッカーの男子高校生の競技人口



付録２　野球とサッカーの男子中学生の競技人口



研究ノート

Richard III、Hobbes、平和

松山博樹（日本大学）

William Shakespeare の *Richard III*は、15 世紀の薔薇戦争における群像模様を描いた歴史劇である。とは言え、圧倒的なカリスマ性を持つ主人公 Gloucester 公 Richard を中心にプロットが展開されていることは疑いようがない。現に、この作品において、Richard の台詞量が全体に占める割合は、他の作品の主人公のそれと比べて、抜きん出ている。ひときわ目立つ悪の個性と、生まれながらの身体的障害を併せ持つ Richard に、観客は恐れと同時に、共感を抱き、共に権力奪取の道を歩むことだろう。共犯関係となった観客と主人公は、王位への道筋の障害となる王侯貴族はもちろんのこと、国家全体を混乱に陥れるべく、権謀術数を疑似体験していくことになる。

しかし、観客がひとたび、Richard の犠牲者たちに目を向けると、彼らもまた実は、一筋縄ではいかない、脛に傷を持った連中であることも見えてくることだろう。たとえば、Richard の讒言によって投獄された次兄 Clarence 公 George は、弟が放った暗殺者によってとどめを刺されようとするに至ってもなお、それが Richard の罠とは気づかず、信頼が揺らぐことはない。

Second Murderer　You are deceived, your brother Gloucester hates you.
CLARENCE　O, no, he loves me, and he holds me dear:
　　Go you to him from me. (1.4.221-3)

Clarence は、自身を投獄せしめたのは、王妃 Queen Elizabeth 一族だと思い込み、恨んでいた。しかし、この両者の不仲もまた実際は、Richard の差し金によるものと推察される。とはいえ、Richard は、平生から王妃一族との権力闘争状態にあった Clarence の野心と警戒心を単に煽ったに過ぎないだろう。結果、Clarence が王妃一族への不信を募らせれば募らせるほど、逆に、Richard への信頼は増していくのである。

また、Clarence の投獄と入れ替わりに出獄した Hastings 卿も、王妃一族を恨んでいる。

HASTINGS　With patience, noble lord, as prisoners must:
　　But I shall live, my lord, to give them thanks
　　That were the cause of my imprisonment.
GLOUCESTER　No doubt, no doubt; and so shall Clarence too;
　　For they that were your enemies are his,

And have prevail'd as much on him as you.
HASTINGS　More pity that the eagle should be mew'd,
While kites and buzzards prey at liberty. (1.1.126-33)

今や、「鷲が籠に入れられて、鳶や禿鷹が好き勝手に飛び回る」、つまり、王妃一族が権勢を誇る時勢となった。「あいつらにはたんまりお礼をしてやる」つもりだと、Hastings 卿は王妃一族への復讐について意気込んでいる。Hastings 卿にとって、Richard は、心中に秘めた本音を語り、共に敵と戦っていく仲間である。

Clarence や Hastings に限らず、*Richard III*に描かれる人々は、長く続いた戦乱を命を懸けて生き抜いてきた一角の人物たちである。それだけに、平和が訪れたひと時であってもなお、権力を巡る争いは治まることはなかった。長年の戦乱を経ての恨み、つらみ、欲望は、権力の栄光を巡って、不信と競争に彼らを駆り立てるのである。そのような中、周囲を罠に嵌め、混乱を煽る Richard は、そのあからさまな悪辣ぶりを恐れられつつも、同時に、人々の危機感を利用し、周囲が自分の権力にすがるような状況を作り上げていくことに成功するのである。

*Richard III*における権力闘争は、競争、不信、栄光の周囲に繰り広げられていた。登場人物たちは、蹴落とすか蹴落とされるかの争いを生き抜いていくために、時には Richard を頼りにする。彼らは、Richard の残酷さを正義に、愚かさを沈着さに、恐怖を知恵に、都合よく解釈しかねない、図太さを持っている。それは、まさしく、社会契約説を発展させ、近代国家に関する政治哲学理論を基礎づけた Thomas Hobbes が *Leviathan*(1651)において、以下のように説いた「万人の万人に対する闘争」の有様とも言えるだろう。

> For one man calleth Wisdome, what another calleth Feare; and one Cruelty, what another Justice; one Prodigality, what another Magnanimity; one Gravity, what another Stupidity, &c. (Hobbes 11)
>
> So that in the nature of man, we find three principall causes of quarrel. First, Competition; Secondly, Diffidence; Thirdly, Glory. (Hobbes 51)

Shakespeare の 20 才余り年下として、同じ England で生まれた Hobbes は、Shakespeare 亡きあと、清教徒革命(1642-1649)に伴う国家的混乱を生き抜くことになる。彼の思想的背景には、内乱を巡る人間の愚かな欲望を目の当たりにしたことがにあったに違いない。Hobbes によると、人間は本能的に自己保存を目指す。ぞれぞれの自己保存の欲望はやがて衝突し、敵愾心、猜疑心、自負心を生み、競争は激化する。*Richard III*で描かれる醜い権力闘争の惨状においてもまた、争いに関する責任が、決してひとりの悪のカリスマ

に帰せられるようなものではなく、Richard の周囲の人間たちにも求められることが示されていた。また、Hobbes は、「万人の万人による闘争」から脱するためには、自己保存の欲望を絶対的な権力に委任しなければならないとし、社会契約の必要性を説いた。*Richard III*においてもまた、登場人物たちは、自己保存のために Richard と争い、時には、その権力に依存していた。社会の混乱、国家の危機は、決して唯一絶対の独裁者によってのみ生じるものではない。それは、社会を構成するひとりひとりの欲望の結果である。私たちは、*Richard III*における醜い権力争いを目の当たりにし、己の生きる不安定な日々の現実を振り返り、人間の欲望や、社会、国家、政治の在り方を再考するきっかけとすることもできるだろう。近年なかったほどに、平和が希求されている今、ひとりひとりの意識の変革こそが平和をもたらすものであることを、私たちは思い出さなければならない。

出典：
Shakespeare, William. *Richard Ⅲ*. New York: Oxford University Press, 2000.
Hobbes, Thomas. *Leviathan*. London: Penguin Classics, 2017.

研究ノート

A Brief Note on Unindividualistic Ophelia, No. 4.[1]

Noboru Fukushima (Nihon University)

4. Ophelia's mad death as redemption

When Hamlet kills Polonius, there is no thought in his mind that he is Ophelia's father. He sees him as this intrusive person, who got what he deserved. Thus, the cruelty of the line “I’ll lug the guts into the neighbor room” (3.4.2I2) is emphasized. However, shortly before Hamlet says this line, he says---

> For this same lord, [Pointing to Polonius.]
> I do repent; but heaven hath pleas’d it so
> To punish me with this, and this with me,
> That I must be their scourge and minister. (3.4.172--175)

Thus, pointing to the dead body of Polonius, Hamlet exclaims, "For this same lord", and regrets his actions, saying that he has done a poor thing, and that heaven is about to punish him through

Polonius and Polonius through him, and that he must be both the whip and the servant of that heaven. Philip Edwards makes a similar point in his New Cambridge edition of *Hamlet*. Thus, Hamlet knows that the murder of Polonius is a crime for which he must eventually pay the price. However, in this scene, Hamlet is so intent on pursuing his mother's crime that his feelings for Ophelia, whose father was murdered, are completely absent from his mind. The fact that Heaven punishes Hamlet through Polonius here of course refers to his crime of killing Polonius in a fit of passion, with no sense of back and forth, which eventually leads to Ophelia's madness and death, a duel with Laertes, and the great punishment of Hamlet's own death. It can also be said to foreshadow the great punishment of Hamlet's own death. It may be said that this was Hamlet's inevitable path to fulfil the mission entrusted to him, but Ophelia's madness was a completely unexpected and too painful sacrifice for him.

Hamlet's bloodthirsty stabbing of Polonius, whoever Polonius is, is the sin of a vengeful, impetuous Hamlet, and although Hamlet himself is not aware of it, it can be taken as clear evidence that he is unwittingly tainted by evil in his attempt to destroy it. Ophelia's mad death can be said to be atonement for Hamlet's mistake. Ophelia goes mad with grief over the loss of her beloved lover and her father, but Ophelia's heartbreaking role lies in that madness is both proof and redemption of Hamlet's sin.

Gertrude's tearful speech about the circumstances of Ophelia's drowning is a beautiful line that is appropriate for describing the death of this innocent girl. Although Gertrude was partly, if indirectly, responsible for Ophelia's broken heart, here she transcends such cause and effect and, like the chorus of a Greek tragedy, conveys the mournful echoes of mourning for the death of a girl of low circumstances, as follows...

> Her clothes spread wide,
> And mermaid-like awhile they bore her up,
> Which time she chanted snatches of old lauds, (4.7.175--177)

The Pre-Raphaelite painter Hughes depicts Ophelia sitting at the base of a willow tree, dressed like a fairy in a variety of plants and flowers. It is as if Ophelia is about to leave the world of men as an innocent fairy, taking on the sins and uncleanness of all who surround her in one body and dying. Bernice W. Kliman, in “What We Hear; What We See: Theatre for a New Audience's 2009 *Hamlet*” of *Shakespeare Survey* 64, says that "she [Ophelia] goes to heaven; she has been loved" (299). Ophelia was tragically doomed to the breakup of her love with Hamlet, madness, and drowning, but she bore the sins of all, and died loved.

The pure and innocent Ophelia was so obedient that she had to obey her father and brother, doubt Hamlet's love, even play the role of a spy, and in the end, Hamlet told her to leave him and advised her to “a nunn’ry, go” (3.I.I49). But it is in this kind of 'puppet' unreliability that Ophelia's

boundless beauty lies. It is in Ophelia's innocence, which is almost ignorant, that Shakespeare created her as the most suitable lover for Hamlet, and it is only through such innocence that Hamlet's sins and crimes can be committed. Shakespeare probably thought that only through such almost ignorant innocence could Hamlet's sins be atoned for. So, the mad Ophelia is not simply a pathetic madwoman. She has the keenness to see through the truth of the king's and queen's crimes and to urge them to reflect on their sins.

5. Conclusion

As we have seen above, the characterization of Ophelia was discussed in terms of Ophelia's innocent entity. As Hamlet says, "Denmark's a prison" (2.2.243), Ophelia was too innocent a woman to live in this Denmark of corruption, vice, crime, and rupture. In this sense, Ophelia was the very opposite of Gertrude, although Hamlet feared that as a woman, she was inescapably tainted by her mother Gertrude's blood. Although Hamlet laments that "Frailty, thy name is woman!" (1.2.146), women are not the only weak ones. All the characters in this play are weak except Hamlet and his friend Horatio. Moreover, Horatio is strong only because he is a 'spectator' all the time. There are no strong characters here like Cordelia, Kent, or Edgar in *King Lear*. Thus, Hamlet must fight almost single-handedly against everyone around him. The outcome of such a battle is self-evident. Ophelia as atonement, it does not atone for the sins of Hamlet the Lover alone. Would it be too much to say that Ophelia died a mad death, perhaps bearing the sins of her father and brother, even those of the king and queen, all by herself? At least, we can only understand the meaning of Shakespeare's Ophelia by taking it as such.[2]

Notes

1) This paper is based on Noboru Fukushima. "'Innocence in Ophelia [Ophelia No Inosensu].'" *Journal of English Language and Literature*. Vol. 32 (The English Literature Society of Nihon University, 1984), 17--28.

2) This series ends here.

Works Cited

Kliman, Bernice W. "Print and Electronic Editions Inspired by the New Variorum Hamlet Project." *Shakespeare Survey* 59 (2006): 157--167.

Shakespeare, William. *Hamlet*. The New Cambridge Shakespeare. Ed. Philip Edwards. 1985. Cambridge UP, 1988.

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

会長の言葉

日本英語文化学会会長

中井延美

３年ぶりに実現した全国大会の対面開催、そして創立 50 周年

猛暑の夏が終盤に向かう頃、今年は 3 年ぶりに全国大会の対面開催が実現した。2022 年 9 月 2 日（金）、明海大学（浦安キャンパス）において、第 25 回全国大会を「創立 50 周年記念大会」を兼ねて開催した。昨年と一昨年の大会時には同会場での対面開催を断念せざるを得ない状況となったが、今年は三度目の正直でようやく本当に明海大学を会場として利用することができた。といっても、まだまだ世間ではコロナ感染への心配が続くなかで辛うじて実現させた対面開催であったため、実際の様子は画像 1（マスク着用）の集合写真のようなものであった。しかし、これでは記念写真としてあまりに残念で悲しい気がしたので、皆さんに無理を言って撮影の瞬間だけマスクを外して協力してもらったのが画像 2 の集合写真である。皆さんの笑顔にほっとするものがある。

【画像 1】

【画像 2】

さて、今年の全国大会では、前半の一般発表のセッションで 3 つの研究発表があり、後半の創立 50 周年記念企画のセッションで 4 つの研究発表があった。一般セッション

では、[1] John Milton の作品における百合の描写の特徴を取り上げた桶田由衣氏、[2] SDGs をテーマに実践した CLIL（内容言語統合型学習）による英語教育の利点と問題点を議論した高橋強氏、[3] ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』における門と柵の表象について検討した小野雅子氏の各発表が行われた。続いて、創立 50 周年記念企画のセッションでは、「日本人の英語習得」をテーマに 4 人の発表者が多様な視点から議論した。[1] 水野晶子氏は、帰国生ではなく日本国内での教育によりコミュニカティブなレベルにまで英語力を高めた日本人が感じる習得の難しさを論じ、[2] 渡辺英依美氏は、イギリスの母語話者による上級英語学習者の訛りの識別結果を報告した（英語による発表）。また [3] 谷憲治氏は、戦後の日本の英語教育にいかにアメリカが関与していたかを検証し、[4] 渡辺宥泰氏は、英語教育界における世界諸*英語*や ELF *への関心が*、*英語*変種に対する学習者の意識に*影響を*与えているかどうかに焦点を当てた（英語による発表）。

　これまでパンデミックの影響で学会活動においても様々な困難に直面してきたが、学問の探究という点で本質的な部分が変わることは全くない。創立 50 周年の節目を超え、これからも我々の研究活動がより成熟したものになるよう、皆さんと力を合わせて歩んでいきたい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

大会研究発表一覧

令和 4 年 9 月 2 日（金）**【対面開催】**

会場：明海大学（〒279-8550 千葉県浦安市明海 1 丁目）

講義棟 1 階　2101・2102・2103 講義室

<u>プログラム</u>

★開会式　11:00

総合司会: 市川仁 (中央学院大学)

閉会のことば 会場校代表挨拶

会長挨拶 中井延美 (明海大学)

★一般発表

第 1 発表　11:15～11:55

タイトル：John Milton の作品における百合の描写

発表者：桶田由衣 (日本大学)

司会：錦織裕之 (元立正大学)

第 2 発表　13:00～13:40

タイトル：CLIL 教育における一考察：SDGs の観点から

発表者：高橋強（東海大学）
　司会：原隆幸（鹿児島大学）

第 3 発表　13:40～14:20
タイトル：『響きと怒り』における門と柵の表象
発表者：小野雅子（東邦大学）
　司会：本間章郎（駒澤大学）

創立 50 周年記念企画 ＜日本人の英語習得–多様な視点から＞
　司会：中井延美（明海大学）

第 1 発表　14:25～15:05
タイトル：日本人にとって習得の難しい分野
発表者：水野晶子（拓殖大学）

第 2 発表　15:05～15:45
タイトル：Japanese or Asian? L2 Accent Identification by L1 English Listeners
発表者：Eimi Watanabe (Hosei University)

第 3 発表　15:50～16:30
タイトル：戦後日本の英語教育とアメリカ
発表者：谷憲治（武蔵大学）

第 4 発表　16:30～17:10
タイトル：Behind Japanese ELF Users' Preference for Inner Circle English
発表者：Yutai Watanabe (Hosei University)

★17:10～17:40 総会
　　司会 中井延美（明海大学）、渡辺宥泰（法政大学）、須永隆広（駿河台大学）

★17:40～17:45 閉会式
　　閉会のことば　副会長　渡辺宥泰（法政大学）

★17:45～17:55 写真撮影

★18:00～ 懇親会

会場・会費 《諸般の事情により、詳細は当日ご案内いたします》

司会 落合真裕（十文字学園女子大学）

◆◆◆

訃報

仁木勝治先生（立正大学名誉教授）が 2022 年 3 月 17 日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

訃報

宮本正和先生（元 山村学園短期大学教授）が 2022 年 10 月 9 日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

追悼文

仁木勝治先生との思い出

田中 保（元日本英語文化学会会長）

仁木先生が令和 4 年 3 月 17 日に 81 歳でお亡くなりになられたとのこと未だに信じられない思いです。

先生との出会いは日本英語文化学会第 2 回全国大会が先生の本務校であります立正大学大崎校舎で開催されたときでした。1999 年(平成 11 年) 9 月 4 日の大会で先生は大会運営委員長として慌ただしい一日であったかと思います。御陰様で大会も無事終了しほっとしましたですね。

その後先生は時間があれば例会や大会にも出席されて発表者に疑問がありますと質問されたり、御自分の見解を述べられたりしまして学会のために御尽力下さいました。ありがとう御座いました。

特に私の記憶にありますことは、私が駒澤大学から在外研究員としてボストン大学に御世話になっていました 1984 年（昭和 59 年）8 月 1 日から 85 年 7 月 31 日までの時期にハーバード大学で「ナサニエル・ホーソン学会」が開催されまして、出席者の集合場所がボストンにあります「ボストン・コモン待合所」でしたが、あの待合所で奇遇にも先生にお会いしたのです。先生も学会に出席するためにアメリカ南部からやって来たとのことで、御一緒に学会に出席できたことです。

学会終了後先生はボストンに一週間ぐらい滞在し文学探訪をしたいとのことで、ボストン大学の私の知人の部屋をお借りし、文学関係の要所巡りをして八日目に南部に戻られました。

私はボストンから帰国してから知ったのですが、先生はあの当時アメリカ南部のオレ

ゴン大学とヴァージニア大学に立正大学の在外研究員として滞在していたのですね。
　不言実行の先生に感服し、先生の御冥福をお祈り致します。

追悼文

宮本正和先生を偲んで

　日本大学元教授　福島　昇

　宮本正和先生、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。ここに、宮本さんとの長年の思い出を記し追悼とさせていただきます。

　私は宮本さんとはかれこれ 40 年近いお付き合いがありました。宮本さんは山村学園短期大学元教授であり、シェイクスピアを生涯にわたって熱心に研究されてきました。宮本さんと私は法政大学の OB であり、また日本英語文化学会（旧名はビュビュロス同人会、ビュビュロス研究会）、日本シェイクスピア協会、英米文化学会、日本英文学会、今は解散した 7 月会の会員という親しい間柄でした。研究者情報によれば、宮本さんはこれまでに論文を 74 本、書籍を 20 冊出版するなど卓越した業績を世に残し、研究発表も数多くなされました。書籍の中には、同じくシェイクスピア研究者である奥様の和恵先生との共著『シェイクスピアへの道標』（ネットヴァレー出版社、2000 年）があります。また共訳にはモーリス・モーガン著『サー・ジョン・フォルスタッフ――演劇的性格に関するエッセイ』（こびあん書房、1999 年）、H.B.チャールトン著『フォルスタッフ――見捨てられた喜劇役者――』（こびあん書房、1998 年）、J.M.ロバートソン著『ハムレット』によせる疑問』（クリエイトコバヤシ、1997 年）、エドワード・ダウデン著『シェイクスピア：精神と芸術の批評的研究』（こびあん書房、1994 年）もあります。

　私の研究分野は宮本ご夫妻と同じシェイクスピアのため、彼が研究発表する際はその司会を務めました。また私が発表する際は司会をしてくださいました。法政大学の非常勤講師室で宮本ご夫妻とお会いした時、演劇のお話が度々盛り上がったことがあります。今となっては懐かしい思い出です。

　7 月会とビュビュロスの研究発表会が終わると、いつも宮本さんは仲間と一緒に法政大学、駒沢大学、昭和女子大学周辺のカラオケ店に繰り出し、演歌や歌謡曲などを歌い、お酒を飲みながら談笑しました。Bibulus はラテン語で酒好きという意味のため、会員の飲みっぷりはその名に恥じぬものでした。宮本さんはシェイクスピア以外では、木曾義仲が好きで舞台で演じるほどでした。また『鉄腕アトム』の手塚治虫が大好きで、そのせいか宮本さんと手塚治虫の風貌は実によく似ています。また写真撮影が趣味で、同会員の新井透先生と私と 3 人で鎌倉や浅草へ撮影に行ったことがあります。宮本さんは 1.5 キロ以上もする NIKKOR 70-200mm f/2.8 の重レンズを一眼レフにつけて撮影し、その腕前は写真コンテストで入賞するほどでした。いただいた年賀はがきはいつも彼が撮影した写真を背景にした一品であり、もう見られないと思うととても寂しく思います。

　宮本さんはシェイクスピアの研究を通して、人生を十分楽しんだ感があります。もう

語ることは何もない、自分は人生を全うし、神の定めた場所にたどり着くだけだと言っているようにさえ思えます。シェイクスピアの台詞を借りれば「あとは、沈黙」（『ハムレット』５幕２場）という心境だと思います。

長い間本当に有難うございました。またあの世で再会できる日を楽しみにしております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。　　　　　　　　　　　　　　合掌

◆◆◆

掲示板

I. 〈*NEWSLETTER* 投稿規定〉

日本英語文化学会 *NEWSLETTER* は文学、文化、言語学、英語教育の各専門分野から幅広く投稿を求めています。〈研究ノート〉、〈書評〉、〈その他〉和文 2,000 字、欧文 800 語程度/

応募締切： 2023 年 9 月 30 日

応募先：日本英語文化学会会報編集部編集長 清水純子 〒181-0005 東京都三鷹市中原 2-25-25 / tel: 0422-41-0029 / e-mail: jesse@jcom.zaq.ne.jp

応募方法：メール （Word 形式の添付ファイル、テキスト形式の添付ファイル ）

掲載の採否については編集部にご一任願います。

投稿原稿の用紙サイズ設定、行数文字数などページ設定に関しましては A4 用紙 Word 標準設定でお願いいたします。「メモ帳」等でテキストファイルに変換した原稿も添付してください。コラム等のレイアウトは編集部にご一任ください。

II.〈『異文化の諸相』投稿募集のお知らせ〉

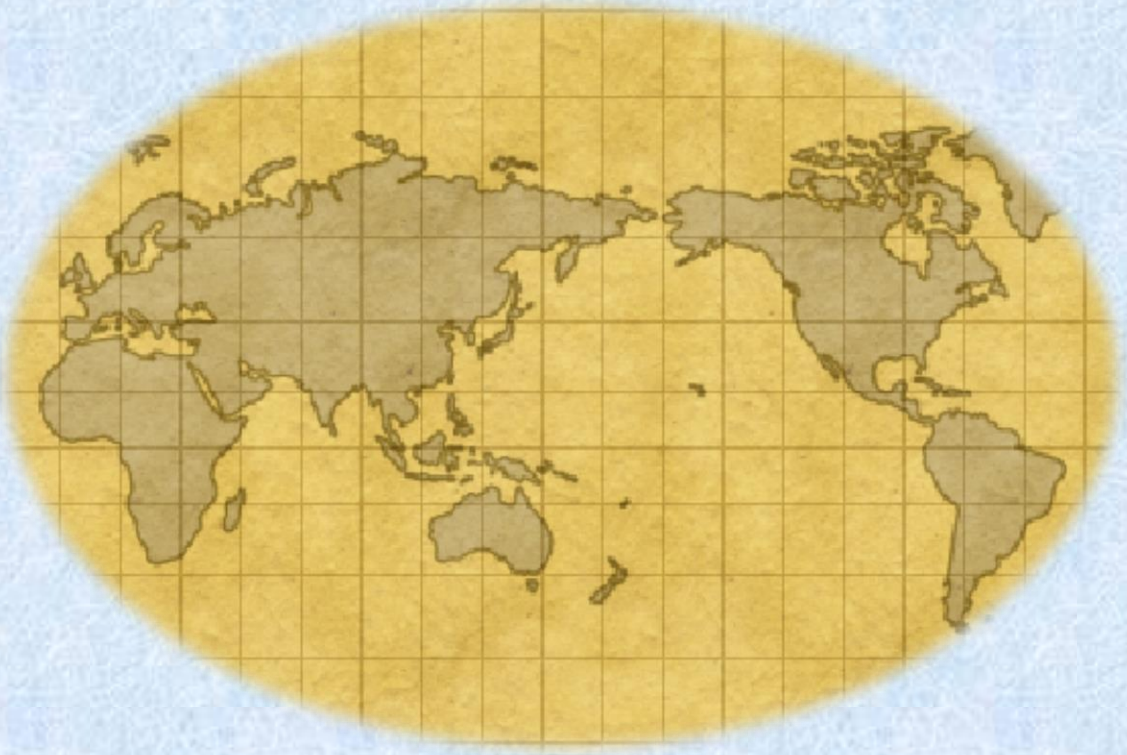
2023 年 2 月発行予定の『異文化の諸相』第 42 号の原稿提出締切日は 2022 年 10 月 4 日です。

投稿を希望される方は学会ホームページの 『異文化の諸相』 投稿規定 (2017 年 3 月 11 日改訂) をよくお読みになってください。

『異文化の諸相』 原稿提出先： 日本英語文化学会学会誌編集委員長

jsce_submission@yahoo.co.jp

第 24 回全国大会総会（2021 年 9 月 3 日オンライン開催）において、同誌 42 号より J-Stage への掲載が前提となることが承認されました。本件についてのご質問等ある場合は、『異文化の諸相』編集委員長（nicchu@hosei.ac.jp）までメールにてご連絡ください。



＜http://nihoneigobunka.jellybean.jp/＞

＊ *NEWSLETTER* は学会ホームページに掲載されます。デジタルファイル /PDF 等は、アップデートができます。見落としや訂正がありましたらご連絡ください。〈編集部付記〉

編集後記

***NEWSLETTER* 編集長　清水　純子**

2022 年 9 月 2 日金曜日、日本英語文化学会大会は無事終了することができました。今年は久しぶりに対面開催でした。参加者の交流をよりスムーズにするための配慮です。

2022 年は悲劇続きの年になりそうです。2 月 24 日、ロシアはウクライナへの侵攻を開始しました。8 か月以上が経過し、双方の兵士と民間人を合わせて何万人あるいは何十万人？の犠牲が出ているにもかかわらず、いまだに収束されません。ロシアのプーチン氏による核兵器使用の脅威に加えて、尊い命を湯水のように消費する無益な戦いは終わってほしいと多くの人々が願っています。また 7 月 8 日には、奈良県で参院選遊説中の安倍晋三元首相が銃撃を受けて亡くなりました。妙な衝動を持つ者はどこにでもいるとはいえ、警備の不備が指摘されています。日本の大きな損失であり、残念な事件です。日本の経済力にも陰りがみられ、円安はとどまるところをしりません。来年は、もっと明るい話題について語れるようになりたいです。

なお「日本英語文化学会」の英文名称は、The Japanese Association for English Studies に変更されました。

編集: 日本英語文化学会/ 編集部: 清水純子　松山博樹 / 発行人: 中井延美
発行所: 〒279-8550　千葉県浦安市明海 1　明海大学　管理研究棟 1718
中井延美研究室　日本英語文化学会　e-mail: nnakai@meikai.ac.jp
2022 年 11 月 20 日発行

日本英語文化学会

© 2022　The Japanese Association for English Studies